

建築文化奨励賞

景観上優れた建築物

どこか郷愁を感じる親しみのもてるまちづくり

大多喜町街なみ環境整備事業景観形成地区

最近、まちづくり、景観などの言語をよく耳にするようになった。住民団体の「房総の小江戸大多喜をつくる会」は平成12年より大多喜町と共に「街なみ環境整備事業」に取り組み10年になる。

大多喜町は歴史的に、徳川四天王の一人と言われる徳川家康の重臣、本多忠勝によって築城された大多喜城の城下町である。市街地の県道、町道に面して歴史的な建造物が多く残されており、江戸時代の城下町のイメージが景観として残っている。環境整備事業として取り組んだ修理、修景事業は、構法、高さ、屋根、軒庇、窓、外壁、色彩、外観の建具、看板等を「まちづくり協定」で規制するもので城下町としての景観を残すための整備事業である。街並みの修景も進み、シンボルである大多喜城の見学と共に観光で訪れる人も増えている。

近年、観光客の形態も団体の大型バスから、小人数の家族旅行に変化しており、宿泊施設や駐車場、飲食施設、トイレ、案内看板等の整備が必要になるだろう。当初計画の「街なみ環境整備事業」は10年で一区切りであるが、まだ完成とは言えない。今後は地域の建築士と住民団体が中心となり、事業の継続が必要である。

第三セクターのレトロな「いすみ鉄道」の再生と大多喜町の観光は一体の関係にあり、土産品の開発、販売も一定の成果はあるが、今後の10年が事業の正念場となる。

(青柳英俊)



大多喜の街並み



商い資料館

(撮影/鈴木博好)

7

建築文化奨励賞

景観上優れた建築物

一部を建て替えて記憶を受け継ぐ

長南町立長南中学校

房総半島の真ん中に位置する人口1万人足らずの長南町唯一の中学校の部分的な建替えである。管理特別教室棟と武道館を残し、1987年の震災で被害の大きかった普通教室棟と体育館を建て替えている。

特注のケーブルラックを天井仕上げに代え、バルコニー手すりにも利用するなどして、維持管理面からの要求をデザインの個性に生かしている。また、体育館の架構では、スチールフラットバーを集成材でサンドイッチすることで鉄と木が相互補完する構造体を試みている。

建て替えられた教室棟と体育館のいずれでも赤レンガタイル貼りが外観を印象づけているが、これは以前から建っている管理棟のレンガ貼りを受け継いでいる。また普通教室棟の南側のバルコニーも、取り壊された旧校舎が南廊下タイプであった記憶を継承している。このように、それまでの学校の空間的記憶の文脈に配慮していねいにデザインされている点を評価したい。

全国どこでも同じ標準設計だった学校建築で、建替えが増えつつある。同中学校も例外ではないが、規模縮小下で改築や建替えは難しい。多様な使われ方を想定した改築が今後増えるであろうことを予感させられた。

(岡部明子)

(撮影/岡田写真事務所 岡田泰治)

建築主：長南町

設計：株式会社榎本建築設計事務所

施工：西松片岡特定建設工事共同企業体

所在地：長生郡長南町長南2060



メインアプローチからの南側外観



アリーナ内観

スチールと千葉県産材の集成材によるハイブリット工法の屋根架構